



「白」をふくらませる。ホワイト版

澁谷克彦

質感豊かな新しい「白」を生み出すことはできるだろうか。

美しい肌の白、花びらの繊細な白、メタリックな白。

たとえば日本画のように透明感があって輝くような「白」の世界を目指す。

オフセットの滑らかな階調表現と白のインキで挑戦した。

——作品コンセプトをお聞かせください。

まずこの話をいただいた時に、興味があることとかやってみたくとにトライするだけでなく、今後の仕事で活かせるような印刷実験ができればいいなと思ったんです。僕は化粧品メーカーでアートディレクションを仕事にしていますので、美しい肌をどう表現するかというのがいつも大きなテーマなんです。なんとかそういう自分の仕事につなげたいという思いもあって、「白」の表現にトライしてみようと考えました。ふだんの仕事では、時間とか費用とかいろいろな制約があって冒険ができないですから、絶好の機会だと。いつもとは違うアプローチで「白」の質感や美しさを追いかけてみることにしました。化粧品の広告における肌の表現にはある種のセオリーのようなものが確立されてしまっていて、ピンク系で抜けるように白い独特の肌ばかりですね。そこで、いつもとは別のアプローチで、たとえば絵画で白い絵の具を使うようなイメージで、白のインキを使った印刷表現を模索してみることにしました。

——新しい「白」の表現ということですか。

美肌表現という観点で言えば、白い紙にプロセス4色で印刷した方が美しく仕上がることは重々承知しています。でも表現ってひとつじゃない。僕はこのトライアルでは、オフセット印刷のポテンシャルを引き出すような、オフセット印刷ならではの「白」の表現を探したかったです。ただ単に白くするだけならシルクスクリーンのほうが効果的ですが、それだとベタツとした白になってしまう。軽快さやグラデーションの滑らかさといった、オフセットの良さを活かした「白」の使い方を探ることにしたんです。たとえて言えば「やわらかな肌」の表現ですね。日本人って古来から色彩感覚に優れていると思っています。肌に限らず「白」の表現に独特の感性を持っているような気がします。特に日本画は白の扱いがとてもうまいと思います。僕は速水御舟の作品が好きなんですが、あのふわっ、さらっとした「白」の表現にいつも感心させられます。日本画では、胡粉という砕いた貝殻からつくられた色材を使って「白」を表現しますが、あの日本画特有の表現は化粧品に通じるところがあるように思えます。超微粒子のパウダー

を、こう、すうっと引いたような、ほのかな透明感のある「白」というか、そういう日本人らしい「白」の美しさにたどり着ければいいな、と思いました。

—実際にトライしてみてもいかがでしたか。

僕自身、これまでオパークホワイトを積極的に使った印刷を経験したことがなかったので、まずはどれくらい白さが表現できるか確かめることから始めました。実験の結果、ニスで下引きして2度刷りすればかなり白く表現できることがわかったので、次にモノクロ写真を題材にした白と黒の表現にチャレンジしました。原稿はパリの古本屋で見つけた古い写真です。この写真の暗い部分は従来どおりインキで表現して、明るい部分を白インキで白く表現しようという試みです。白い紙だと白インキの効果がわからないので、わざとベージュの紙を使いました。スミ版とホワイト版をいろいろ組み合わせたりして、十数パターン印刷実験をしました。最終的に作品に展開できたものもあったし、実験だけで終わったものもありますが、とても貴重な経験ができました。



—次がいよいよ肌の表現へのチャレンジとなったわけですね。

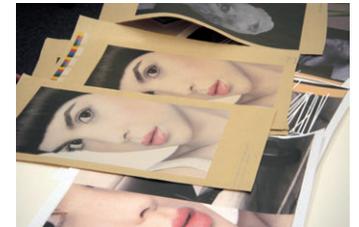
モノクロ写真の実験でなんとなく方向性が見えたので、同じ手法で



肌の表現にチャレンジすることになりました。用紙のベージュ色が肌色の一部になって、それよりも濃い部分はプロセス4色のインキで、明るい部分は白インキ主体で表現する方法です。プロセス4色の版とホワイト版を何通りもつくって、それぞれを組み合わせで印刷したものを見比べながら、徐々に方向性を探っていきました。でもこれがなかなかスムーズにいかなかったですね。紙のベージュ色が思いのほか濃かったというのも要因もあるのかもしれないけど、白い紙にプロセス4色で刷ったほうがよく見えるんです。でも、そもそも白い紙に刷ったものと見比べてはいけないですね。新しい表現を模索している訳ですから。

—トライアルの成果はいかがでしたか。

実験を重ねていく中で、肌だけじゃなく、例えば金属と花とか、モチーフに応じた白の効果的な使い方と質感があるんじゃないかと思ったんです。そこで、肌、飛行機、石膏像、モノクロ写真、花と5つの異なる質感のモチーフを選び出して、プリンティング



ディレクターの金子さんと一緒に試行錯誤しながら「白」をテーマにしたグラフィックを作り上げました。単に白いというだけでなく、滑らかなグラデーションもあれば、半透明のような白さもあります。シャープなものもあればやわらかな質感もあるといったように、それぞれ紙を変えて、手法も変え、バリエーション豊富な「白」が表現できたように思います。仕事場でたくさんのテスト刷りを広げて、ああでもないこうでもないで見比べていると、「それなんですか？」などと会社の若い子が興味深げに覗きこみます。実はこうこうしかじかで…と説明するとみんな一様に、面白いことしてますね！って。久しぶりにグラフィックをじっくり制作したって感じで、とても満足しています。

白インキの発色を確認する

クラフト紙の上にオベークホワイトで印刷。1度刷り、2度刷り、ニスを下に引くなど数パターンを作成。白の発色やグラデーションの表現を比較した。

- a. オベークホワイトをスクリーン角度を変えて2度刷りしたもの
- b. オベークホワイトを1度刷りしたもの



a.

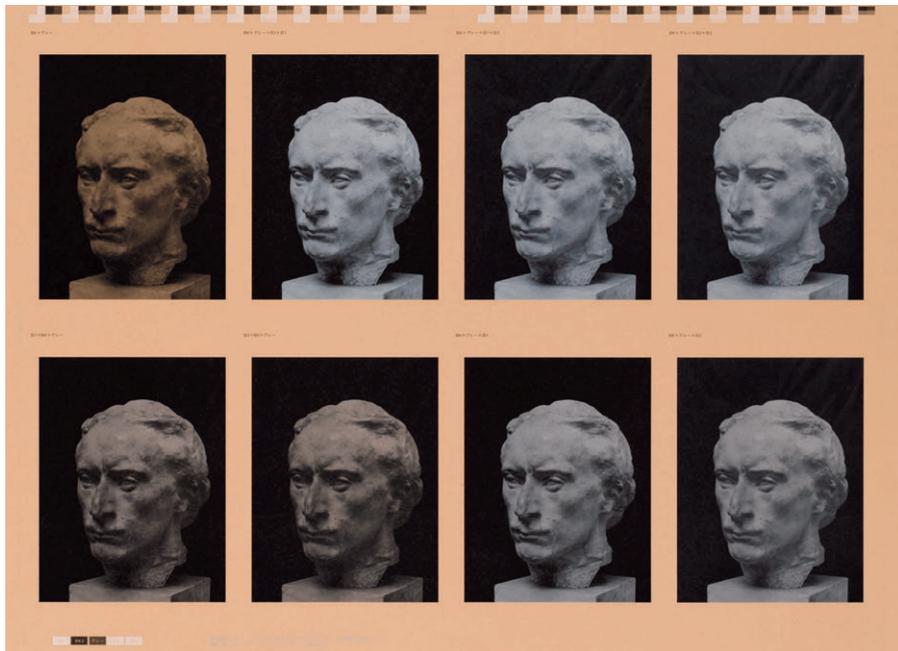
b.



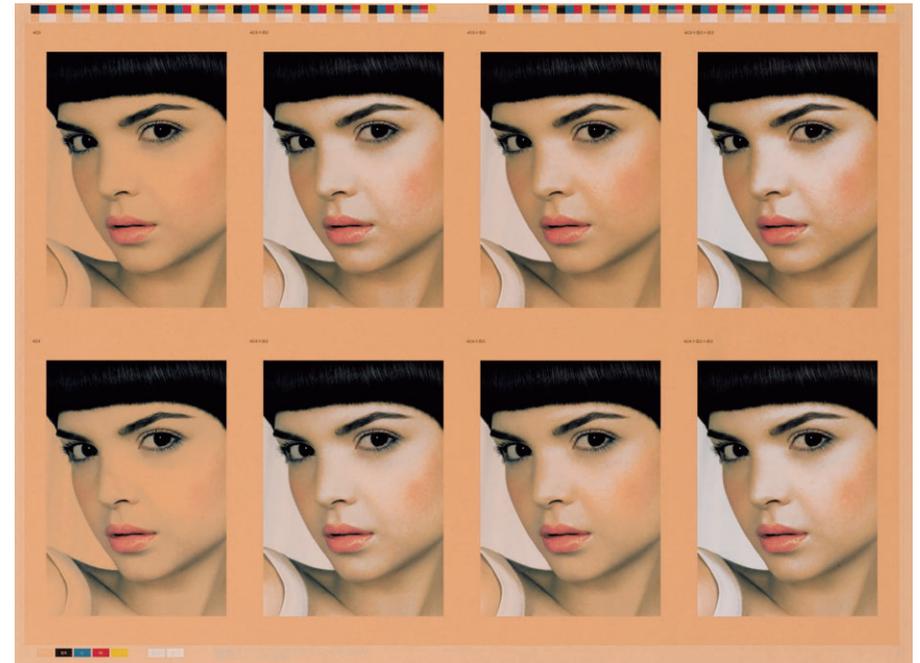
原稿

モノクロ表現における白の実験

ブラックとグレーのダブルトーンとホワイト版を組み合わせた実験。ホワイト版はネガ反転させた画像をベースに2パターン作成。階調表現や白の印象を模索した。



用紙：NBファイバー／白茶



用紙：NBファイバー／白茶

カラー表現における白の実験

プロセス4色の画像とホワイト版を組み合わせた実験。プロセス4色の画像は色紙の色を考慮して濃度を調整。ホワイト版はネガ反転させた画像をベースに硬調に製版した。紙地の色を生かした肌の表現を模索した。



原稿



a.

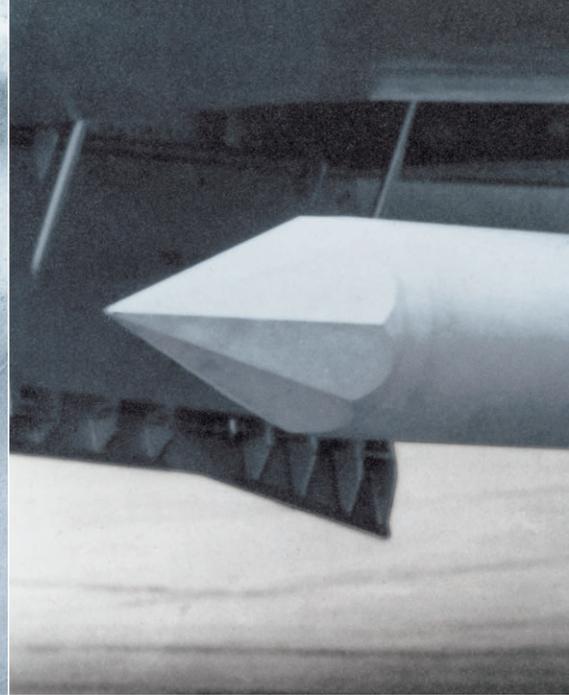
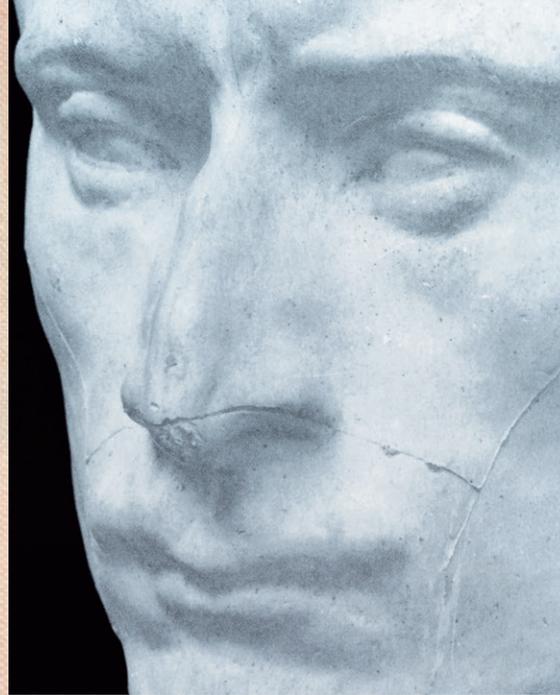
b.

c.

d.

e.

- a. 用紙:ジフ / 栗 四六判 100kg 版の構成:グロスニス→プロセス4色→オベークホワイト4版
 - b. 用紙:ルーセンス S / ホワイト 四六判 90kg 版の構成:グロスニス→銀→ブラック2版→オベークホワイト2版→ブラック→オベークホワイト2版
 - c. 用紙:ルミナカード / 黒 L判 200kg 版の構成:グロスニス→オベークホワイト4版
 - d. 用紙:ルミナカード / 黒 L判 200kg 版の構成:グロスニス→オベークホワイト6版
 - e. 用紙:キュリアス メタル / グレー 四六判 103kg 版の構成:グロスニス→オベークホワイト→プロセス4色→オベークホワイト4版
- ※展示作品は仕様が変更場合があります。



design detail

a.	d.	b.
	c.	e.